



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

子どもと薬

●子どもは大人を小さくした人ではありません

一般的に飲み薬を服用すると、腸で体内に取り込まれ(吸収)、血液を通して体のあちこちに送られ(分布)、肝臓で分解されたり排出しやすい形に変化し(代謝)、尿などから体の外に排出(排泄)されます。子どもと大人ではこの働きに若干の違いがあるため、大人が使う薬をただ単に量を少なくして子どもが服用すると、効果がなかったり、逆に効きすぎて副作用が出たりすることがあります。

まず、薬の吸収に関しても、大人では胃酸によって胃の中は強い酸性ですが、3歳ぐらいまでは胃酸の分泌が少なく、胃の中は大人のように強酸性にはならず中性に近くなることがあります。そのため、酸性の性格を持つ薬ではイオン化して細胞膜を通過しにくくなるため、吸収が悪

くなり効果が低下することがあります。また、大人に比べて子どもは胃から腸へ薬や食物などが運ばれるまで時間がかかるため、薬が体に吸収される腸へ届くまでの時間も長くなるので、薬の効果が現れるまで時間がかります。逆に、ゆっくり溶けて長い時間効果が持続するように作られた薬では、胃での滞留時間が長いので、薬の有効成分が胃の中でより多く溶け出してから腸に送られ吸収されるため、薬の効果が強く現れたり、副作用が起こったりすることがあります。

薬の分布に関しては、子どもは大人に比べ体内水分量の比率が高く、水溶性の薬の場合、体内水分量の比率に合わせて体重あたりの薬の量を大人より多くしないと同じ効果になりません。また、「血液脳関門」という脳の中に危険な物質を入れないようにしているバリア機能があるため、大人にとっては安全な薬でも、子ども、特に新生児では血液脳関門の機

能が未完成なために危険な薬もあります。

薬の代謝に関しては、子どもは大人より肝臓の大きさが体に比べ大きいので、薬の分解速度が速くなり、薬の効果が早く失われることがあります。

薬の排泄に関しては、子どもは腎臓の働きが十分ではなく、腎臓から排出される薬では、十分に排出されず少しずつたまっていき、長期間服用していると体の中に存在する薬の量が増えてしまい、副作用が起こったりすることがあります。

このように、子どもは生理機能が大人とは少し違うため、大人用の薬を代用するのは絶対にやめてください。子どもには、子ども用の薬が、用法用量のところに年齢別の服用量が書かれた大人も子どもも使える薬を使いましょう。

(北区) 薬局エヒラファーマシー

松本 博志